タチウオ底曳縄漁法について

山　田　鉄　雄

The Bottom Troll-angling of Ribbon Fish in Tachibana Bay

Tetsuo YAMADA

The bottom troll-angling of ribbon fish, *Trichiurus lepturus* LINNÉ at Tachibana Bay has been carried out since several years ago. It is the positive method of angling, effectively utilizing the behavior of the fish, but the author supposes that there remain some problems to be improved concerning the fishing instruments and methods.

タチウオ底曳縄漁業は，1968年ごろから橘湾ではじめられたが，業者によればこれは愛媛県から伝わったものとのことである。

タチウオ *Trichiurus lepturus* LINNÉ は従来天秤釣のほか主に延縄で漁獲されていたが，海底に延えた縄が他の船の縄と重なったり，底曳船に引かけられたりして漁具の損失が多かった。然るにこの曳縄漁法ではそれらの心配がなく，かつ日中操業ができるので都合が良く，漁獲も相当に揚がるので，網場漁協の場合，組合員 85人中60人がこの曳縄に従事しているが，その他の橘湾沿岸漁村にも次第に普及しつつある。

本調査に当っては，網場漁協の組合長松田英一氏に負うところが多い。記して謝意を表する。

調　査　結　果

漁　期

漁期は４月下旬から10月下旬に及び，５～６月が盛期であるが，1970年は４月20日から５月20日にかけて良い漁があり，１船１日 300～500尾の釣獲があった。魚体は全長 80～100cm の大型であった[1]。１日30kg 以下の漁獲では赤字になるという。

11月になるとタチウオは湾外へ退去しはじめ，漁獲が減少するので，漁船は他魚種の底延縄に転漁する。

漁　具

幹縄は合成繊維の 20～30号で，その長さはほぼ水深に同じくする。その先にフンドウと称する５～７kgの鉛の重錘をつけ，その先に Fig.1 のように約20本の針をつける。フンドウから最初の針までの長さは約 4.6m，それに続く針の枝間も同じく4.6m間隔である。枝

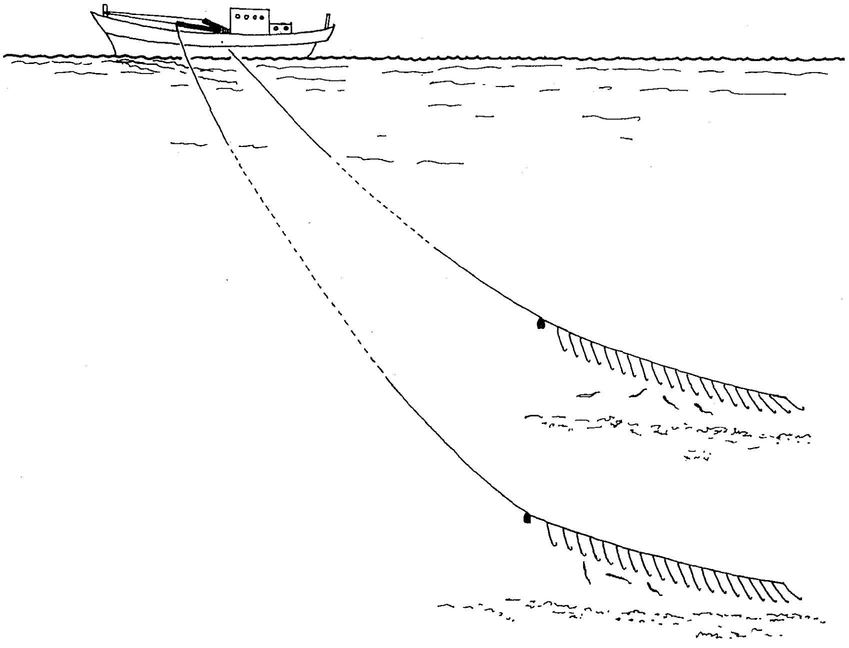

Fig. 1. The bottom troll-angling of ribbon fish.

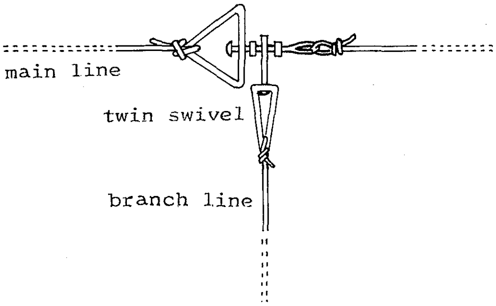

Fig.2. The twin swivel connecting the branch line with the main line.

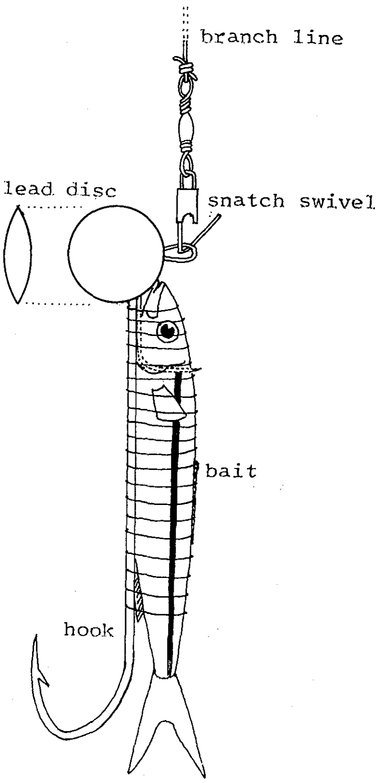

Fig. 3. The hook and bait connected with the snatch swivel.

糸は合繊 15～20号長さ 2.6m で，親子サルカンで幹縄に連結する（Fig. 2)。幹縄の末端には重りをつけない。

針は Fig.3 の如く，長さ 12cm，頭に直径2cm の円盤状鉛が固着され，その頭についているスナッチナスカンで枝糸末端に簡単に付け外しができるようになっている。この円盤には別に短い餌刺針がついている。

餌は塩蔵キビナゴの全長10～12cm位のものを用い，腹の方を針のクキに沿え，細い針金で巻きつける。合繊糸では1回で食い切られるが，針金なら2～3回は使用に耐える。予備として餌つき針を 300本位用意する。これはタチウオやフグが枝糸をかみ切ることが多いためである。特に枝糸が幹縄にまきついた時は，幹縄もろともかみ切られることがあり，その被害は大きい。

漁　法

船は0.8～5T，Diesel 4～30HP 程度のものがほとんどで，1人乗である。午前2時ごろ網場漁港を出て，午後1時過ぎには帰港する。これは魚市場の締切が午後4時のため，それに間に合うように水揚せねばならないからである。

船のブリッジの前に，両舷に長さ7mの張出竹があり，その先端から曳縄が出ているので2本曳である。漁場に着くと左右の曳縄を片方ずつ入れる。入れ終わるとフンドウを海底から7～8mの高さにあるように加減すれば，最後の針は海底スレスレを曳くようになる。縄の調子を整えたら超微速で曳行する。船が速いと針が浮いてしまって，魚群の分布層から外れる。

10～15分曳行した時，片方の縄を揚げて見てタチウオのかかり具合を調べ，曳方や漁場の良否を判断する。

1回の曳行時間は漁獲次第できまっていず，よく食う時は1日に 100回以上も操業することがある。

考　　察

タチウオが日中は海底近くに居る習性を利用した積極的な釣漁法である。枝糸をワイヤにすること，キビナゴ餌を擬餌にすること，潜航板の使用などを今後考えて見る必要があるように思う。しかし現在のところ業者はこれらの意見に対しては消極的である。

要　　約

タチウオ底曳縄漁法は，タチウオの習性を巧みに利用した積極的釣漁法で，将来性があると思われるが，漁具漁法上擬似針や潜航板の使用などなお研究すべき点が残されている。

文　　献

1) 山田梅芳：西水研研究報告，32，135－160（1964）